

S S K

視覚 障害

昭和五十七年六月一五日SSK通刊第七五四号（毎月六回、5の日、0の日発行）
昭和四十六年六月一七日 第三種郵便物認可



その研究と情報

1982年7月 No.60

I S S N 0385-7476

原爆に夫を奪われて

神田三亀男編

広島農婦たちの証言―川内温井地区の「ピカ後家」と呼ばれる年老いた農婦たちが、凄惨な生き地獄の体験と生活史を初めて語る。
〔岩波新書〕定価三八〇円

原爆の子

長田新編

広島少年少女のうったえ―幼い頃原爆に遭遇し心に深い傷をうけた広島少年少女が書き綴った、あまりにも真実で厳粛な体験の記録。
B6判・定価一〇〇〇円

ヒロシマノート

大江健三郎著

死に対決しつつ生きる広島被爆者達の「悲慘と威厳」に満ちた姿に直面した著者は、平和と人間性を求めて現代という時代を告発する。
〔岩波新書〕定価三八〇円

1945年8月6日

伊東壮著

ヒロシマは語りつづける―みずから被爆した著者は原爆の恐ろしさを訴えるとともに、核戦争を防ぎ人類が生きる道を探ります。
〔岩波ジュニア新書〕定価五三〇円

きみたちと現代

宮田光雄著

生きる意味をもとめて―若い世代の人達に「現代をどう生きるか」を問い、人類の課題の中に生きる意味を見出すことの大切さを説く。
〔岩波ジュニア新書〕定価五三〇円

核の大火と「人間」の声

大江健三郎著

地球全体を覆う核戦争の危機に抗して、想像力を駆使していかにかに戦うか、反核運動の昂まりの中、日本各地で精力的に行った講演の記録。
B6判・定価一五〇〇円

歴史の転換のなかで

小田実著

21世紀へ―天下大乱を予感させる世界の人びとの動きを生き生きと伝えるとともに、21世紀へ向かう世界の新しい見取図をえがく。
〔岩波新書〕定価三八〇円

広島・長崎の原爆災害

広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編

広島・長崎が被った原爆災害の実態と推移を明らかにし広く伝えるために、物理・医学・社会科学の諸側面から集大成した全国民必見の白書。
B5判・定価五八〇〇円

写真集 原爆をみつめる

飯島宗一編
相原秀次編

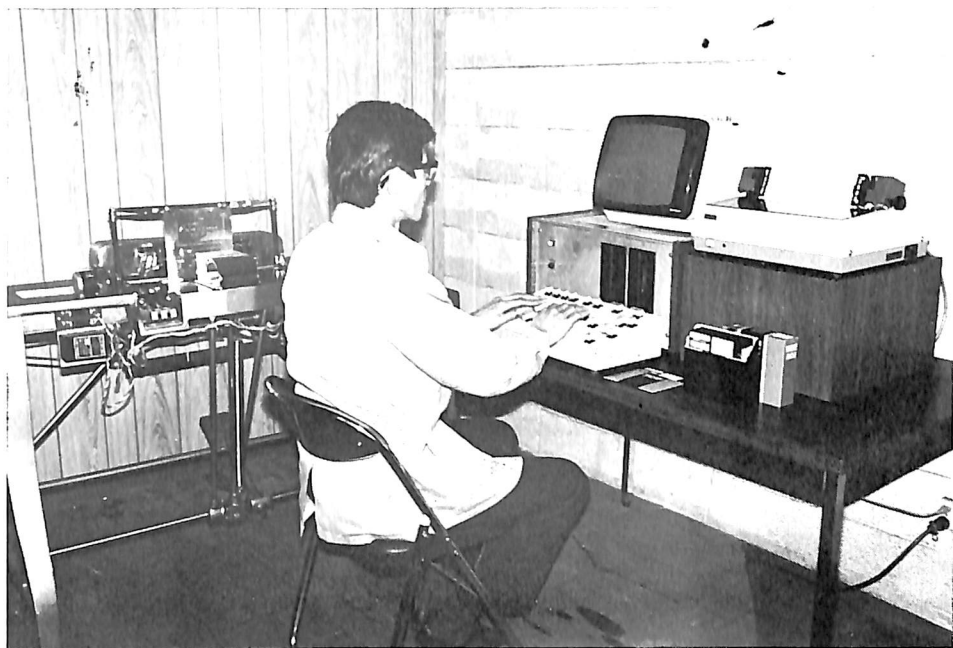
一九四五年・広島・長崎―日本人撮影による約三〇〇枚の写真と、被爆者の体験なども織り込んだ本文により災害の状況を克明に描く。
A4判変型・定価四二〇〇円

岩波書店



東京千代田一ツ橋
振替〈東京〉6-26240

点字とコンピュータ

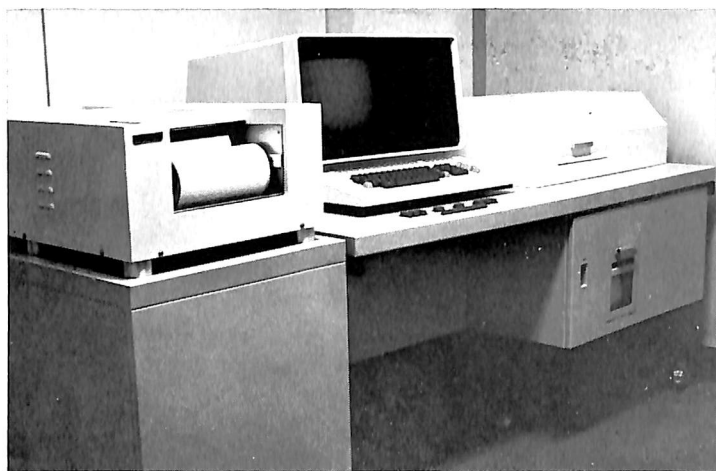
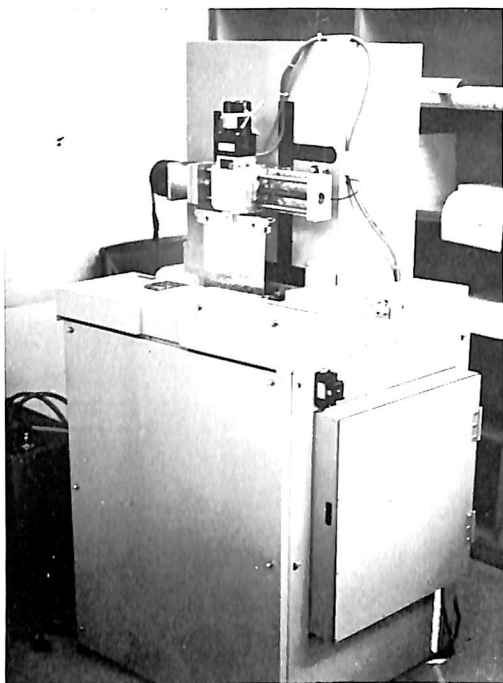


点字自動編集製版システム

日本ライトハウス点字出版所での製版作業は、ほぼ全面的にこのシステムに移行している。このシステムは、点字キーをたたくとフロッピー・ディスクに入力され、マイコンを利用して、ブラウン管ディスプレイを通して校正を行ない、きれいなデータにしてから自動製版機で亜鉛板に製版する。そのため、従来の製版作業のように直接、亜鉛板を修正するといった手間がかからず、また、入力の際も自動的にマスあけの部分で行がえされ、ページも自動的に付けられ、校正の際も、誤字・マスあけの訂正はもちろん、今まで困難だったレイアウトの変更、大量の脱字も簡単に修正できるので、従来の作業より格段に能率的である。自動製版機は、小林鉄工所製。既存の電動製版機をコンピュータ用に改造したもので、行上げにはパルスモーターを使用しているので行間は自由に調節できる。

自動製版機

日本点字図書館が依頼し、芝浦工業大学の協力の下に小林鉄工所が製作したコンピュータ用製版機。フロッピーディスクにより駆動するが、表面を打ち終わると自動的に反転し裏面を打つのが特徴。また、行間・マス間をパルスモーターにより、無段階に可変できるので、点図など幅広い使い方が可能になる。これは試作機であり、現在最後の調整中で、間もなく日本点字図書館において、本格的な使用実験が開始される。



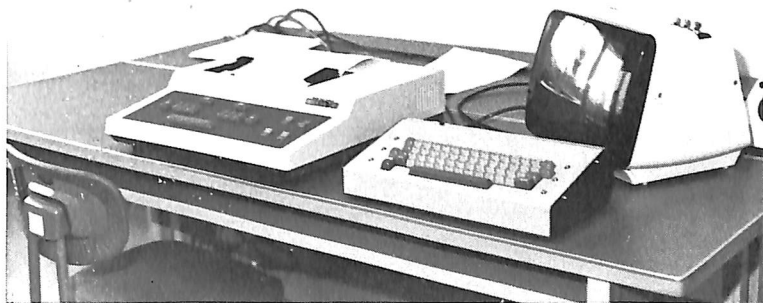
ブレイル・マスター

松下通信工業製。片面に書かれた点字を光学的に読み取り、ブラウン管上で、校正編集作業を加えた後、ラインプリンターで点字を打ち出す。墨字（カタカナ）を打ち出すこともできる。最大24行・32マス。片面であることや、編集機能などに多少の問題はあるが、フロッピー・ディスクを介して、自動製版機を駆動することも考えられ、点訳者の力がより有効に利用できることになろう。いくつかの盲学校では、すでに教材作りなどに利用されている。



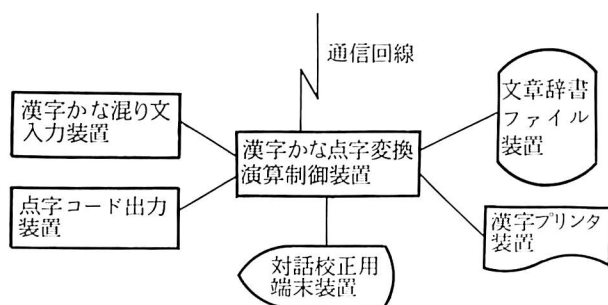
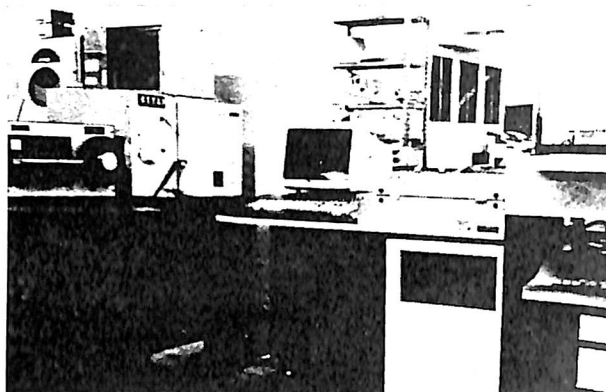
6点漢字ワードプロセッサ

筑波大学付属盲学校、長谷川貞夫教諭が研究・開発したもの。6点漢字を点字キーで打ちこむと、ワードプロセッサにより墨字化され、紙にプリント・アウトすることもできる。当然、6点漢字記号をマスターしなければならないが、盲人が正眼者の力を借りることなく、漢字かな交じり文を墨字化することができる。



ブライユ・データ・ターミナル

東京都立工業技術センターで研究開発され、白雷商会が商品化した点字端末装置。コンピュータなどに接続し、点字で機械との応答ができる。外国には数機種あるが、国産品はこれが最初。盲人コンピュータ・プログラマーに欠かさない製品である。利用範囲は広く、使い方は今後の課題だが、無限の可能性を持っていると言われる。（本誌No.57インフォメーション・コーナー参照）



漢字かな点字変換装置

通商産業省工業技術院で研究したもの。墨字の漢字かな交じり文を読み取り、かな変換から分かち書きまで自動化して点字に出力する。そのために約10万語を単語辞書としてコンピュータにファイルしてあるという膨大な装置である。現段階での評価は控えた方がいいだろうが、変換精度は高いとは言えず、実用にはほど遠い。意欲は認めるものの、日本語そのものの複雑さ——漢字の、時と場合に応じた読み変えなど——、日本語点字の難しさ——数字とかなの使い分け、意味の違いなどによる分かち書きの違いなど——を考えると、この方向での実用化は当面期待しにくい。それよりは、日本ライトハウス、松下通工、日本点字図書館などでめざし実施している、点字化されたもののコンピュータ処理や、さもなくば、長谷川式6点漢字、川上式漢点字を使用しての墨字点字相互変換といった方向の方が、日本語に関する限りは、コンピュータの利用価値が高いと思われる。

目 次

1982年 7月 №60

2 ページ評論	長谷川 健介 ... 2
---------------	--------------

特集 日本語の読み書きに関する 情報処理システム

座談会 視覚障害者と日本語の文字情報処理	5
尾関育三・加藤俊和・長谷川貞夫・ 長岡英司・木塚泰弘	

この人 プログラマーで第一歩を踏み出した 石田透さん	32
-------------------------------------	----

昭和57年における大学進学と就職状況について.....	36
-----------------------------	----

インフォメーション・コーナー	43
----------------------	----

視覚障害総目次 №51～№60	51
-----------------------	----

編集後記	55
------------	----

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

編集後記

最近大衆の間に、目を見張るような勢いでパーソナル・コンピューターが普及しています。当然、盲人の間にも関心が高まり、その生活の中に徐々に入ってきています。パソコン・クラブを作って、お互いに勉強するグループもできています。

世界に誇るわが国の技術を、私たちの世界にどのような形で導入したらいいのか、また、さらに積極的に、どのように活用すべきかについては、すでに一部のマニアだけにまかせる時期は過ぎています。できるだけ多くの人が関心を持ち、その導入を真剣に考えるべきではないでしょうか。

このような観点から本号では、特に日本語の読み書きの領域における活用方法について、座談会を組みました。私たちの仲間の中では、コンピューターに最も近い立場にある方々ですので、この分野への皆様のご理解にお役に立つ記事になったと思われます。

「80年代の視覚障害児教育(10)」は、筆者の都合で今回は休載します。悪しからずご了承下さい。

かねてから準備を進めておりました「標準点字表記辞典」は、すでに一般の書店から販売されています。ただ注文買取制になっていますので、店頭に並べてある所は少ないと思いますが、「発売元博文館新社、東販日販のルートに乗っている」とおっしゃれば、必ず取り寄せてくれます(定価 1500 円)。ご存じのない方にも、お勧めくださいますようお願いいたします。(田中徹二)

視 覚 障 害 1982 年 7 月 No.60
年間購読料 2,500 円(送料とも)
発行日 1982 年 7 月 1 日
編集人 (連絡先)
日本盲人福祉研究会
〒160 東京都新宿区高田馬場 1 丁目
日本点字図書館内 23 番 4 号
電話 (03) 200-1130
振替口座 東京 6-16103
発行人 身体障害者団体定期刊行物協会
〒157 東京都世田谷区砧 8-21-3
印刷所 合同印刷株式会社
〒130 東京都墨田区業平 2-9-13
電 話 (624) 6111 (代表)

協賛団体 日本点字図書館